ISSUE
91
Jan.-Mar. 2020

神戸アートビレッジセンター
Kobe Art Village Center

# ART VILLAGE VOICE

お正月は、大にぎわいの楠公さんに
初詣した後、屋台で甘酒を嗜む
のが楽しみやね。でも喜楽館で
明るく新開地らしい年明けも
ええな〜！さて、KAVCでは、
移民の歴史や外国人移住・労働者
に焦点をあてた展覧会や神戸の
カンパニーによる魅力的な
コンテンポラリーダンス公演など、
令和最初の新年も、催しが目白押し！
あったかい格好して、見にきてや〜。

楠木正成が祀られていることから、「楠公さん」の愛称で親しまれている湊川神社。
初詣のシーズンにはなんと100万人以上（！）の参拝客で賑わう。（多聞通3-1-1）

2018年に新開地にオープンした演芸場。1月1日（水）〜5日（日）
には新春特別興行を開催予定！（新開地2-4-13）

30〜40代を対象にした公募プログラム「ART LEAP」で選出された、潘逸舟氏の展覧会を実施！
詳しくは中面「神戸みちくさ天国」にて。

神戸のダンスカンパニー・Ensemble Sonneによる公演は、
2月1日（土）、2日（日）開催！

ART VILLAGE VOICE —— CONTENTS

**KAVC CONVERSATION #04**
地域に寄り添い、地域と向き合う　神戸新開地現場談義　鼎談：埓下憲司（神戸市立兵庫図書館）×西島陽子（PRディレクター／編集者）×羽仁真理子（KAVC）
**STORY** KAVCスタッフと、ときどき保安のおっちゃん物語｜**STAFF's VOICE** KAVCからのお知らせ
**KAVC REPORT：出張ダンスワークショップ@神戸市立湊川中学校**
**KAVC これ、見た？ REVIEW** レビュアー：風間雄飛｜**新開地新名物 vol.8** 芦原温泉の「番頭さんの記念撮影」
**EVENT SCHEDULE 2020.01-03**｜**神戸みちくさ天国**｜**KAVC パフォーミングアーツ瓦版**

www.kavc.or.jp

KAVC CONVERSATION #04

# 神戸新開地 現場談義

## 地域に寄り添い、地域と向き合う

20世紀初頭、湊川の付け替えと埋め立てでできたまち「新開地」は、時代時代でその様相を変えてきました。芝居小屋や活動写真小屋が立ち並ぶ一大歓楽街にはじまり、第二次世界大戦中の神戸大空襲による地区全焼を経験し、戦後は映画館を中心とした娯楽施設が勃興。そして高度経済成長期より商業施設が次々に三宮に移り、徐々に活気を失っていくなか、「神戸アートビレッジ構想（※）」の活動拠点となる施設として、阪神・淡路大震災の翌年に開館したのが神戸アートビレッジセンターでした。今回の特集鼎談では、「文化・芸術」を軸としながら、「まち」の現在を考え、その生きている環境＝地域のなかで活動していくこと、そのあり方について話していきます。

※神戸アートビレッジ構想：
新開地の「文化・芸術の街」としての活性化を図るべく、1991（平成3）年に策定
参考：新開地ファン Webサイト「新開地ヒストリー」https://shinkaichi.or.jp/

## 坪下憲司×西島陽子×羽仁真理子

［神戸市立兵庫図書館 館長］　［PRディレクター／編集者］　［神戸アートビレッジセンター 地域事業担当］

### 良さを掘り起こし、つなげていく

**羽仁：**神戸アートビレッジセンター（以下、KAVC）の自主事業は演劇・ダンス、美術、映画、地域の4つに分かれているのですが、なかでも地域事業は、ほかと少し毛色が違います。先日、神戸市立湊川中学校でワークショップを終えたばかりの公共ホール現代ダンス活性化事業[01]がまさにそうですが、新開地商店街のなかにあるアートセンターとして、新開地・神戸に何を還元できるかを考えています。今回おふたりと話すなかで、“地域で活動すること”について、深く考えられたらいいなと思っています。まずはおふたりのこれまでの活動について、お聞きしたいです。

**西島：**私が新開地に来たのは2005年なのですが、それまでこの土地に縁もゆかりもありませんでした。新開地100周年のタイミングでお誘いを受け、新開地まちづくりNPO[02]の広報・PR担当に就任しました。最初に手がけた仕事のひとつが「ザ・シンカイチツアー」[03]という企画。当時は「新開地は面白そうだけど、行ったことがない」「おじさんばかりで怖い」「誰かが連れて行ってくれたらいいんだけど」という声をよく聞いていたんですね。

**羽仁：**私の周囲からもそういう声を耳にします。

**西島：**そうなんです。そこで私自身がガイドになって、新開地ビギナーを受け入れる気持ちもある、おいしくて歴史のあるお店をピックアップして、ツアーをやろうと（笑）。メディアにもたくさん取り上げていただき、1年後には月1回の定番イベントになりました。なによりびっくりしたのは、ツアー参加者が後日お友だちやご家族を連れて新開地に訪れるようになったこと。まちのファンになってくれる、連れていきたいと思ってもらえるような仕組みができて、それが好循環になっていったんです。

**羽仁：**ツアーは2018年に第100回をむかえ、それが最終回でしたね。先日、新開地商店街で行った「新開地カブキモノ大興行」[04]でもガイド兼司会の役をお願いして、台本ありの演技までご披露いただきました（笑）。そんな西島さんを見ていると、まちを掘り起こすことは、まちとの関係性を築くことにも通ずるのかもしれないと感じます。

**西島：**ガイド兼司会はかなりハードル高かった（笑）。いまでこそ、例えば、おでん屋の高田屋 京店さんにも若いお客さんが入っていますが、以前はおっちゃんしかいなかった（笑）。長く続けるなかで、劇的にではなく、ジワ〜っとまちが変わっていく様子を感じています。

**羽仁：**坪下さんは、図書館での活動のなかで、まちとの関わり方についてどのように考えていますか？

**坪下：**神戸市立兵庫図書館[05]は、「地域図書館」という冠が付いているのですが、それにどういう意味があるのか、実は僕自身、5年ほど前までは考えたことがなかったんです。たしかに、地名が名称に付いた図書館は各地にある。でも、そこで働いている人で、地域特性をデータとして理解するだけでなく、身体的に実感できている人はどれぐらいいるのだろうかと。というのも、図書館からほど近い兵庫大開小学校の秋祭り的な催しにお邪魔したことがあったのですが、そこで地域の人が集まって紙芝居の上演や絵本の読み聞かせが行われていて。「えー！　僕たちに声をかけてくれたら、絶対参加するのに……」と愕然としました。そもそも、そういう発想が小学校にも僕たちにもない状態だったので、これはまずいと思ったわけです。

**羽仁：**地域図書館が現状どう受け取られていて、これからどうあるべきか自身に問うような機会があったんですね。

**坪下：**そうなんです。いまでこそ「地域の情報を発信する」「まちづくりの拠点」と僕たちも掲げていますが、以前は身の丈に合っていないような感覚があって。胸を張って「地域の図書館です」と言えないないという想いが、だんだんと強くなっていきました。それで、僕が館長に就任した2015年、スタッフも含めて「だったら本物の地域の図書館になってみよう！」と、館のスローガン「本当の地域の図書館になりたい」「カウンターの向こうへ飛び出そう」をつくりました。最初は「兵庫区はいま一体どうなっているんだろう？」と、本やインターネットで調べていって。地元商店街でお手伝いできることはないかと「ジョイエール御旅」[06]という近所の小売市場に赴いたんです。

**西島：**そうだ。当時、私が『ジョイエール御旅かわらばん』という地域情報誌の編集を担当していたんです。坪下さんのお話を聞いて「それだったら、私たちが兵庫図書館の取材をしよう」ということに。懐かしい（笑）。

**坪下：**そうですね（笑）。市場のWebサイトや印刷物に図書館の人間が出たのは、神戸でも初だと思います。ジョイエールさん、西島さん、兵庫図書館があるからこそ生まれた状況ですよね。そういったこの場所でしか生まれないことを一つひとつ大切に積み上げていくと、「地域図書館」に見合う活動や運営ができるのではと思っています。

**羽仁：**兵庫図書館のスローガンに「飛び出そう」とありますが、やっぱり自分がまちに出ていくことは大事だなと私も実感していて。今年で2年目を迎えた「KOBE CINEMA PORTフェス」[07]は、近隣の飲食店や新開地まちづくりNPOさんにもご協力いただいているのですが、日常的にお店へ出向いて、ご飯を食べたり、世間話をしたりするなかで関係性が生まれ、それが企画全体に響いている気がします。西島さんはまちとの関係性を育てていくなかで、新開地のとらえ方が変わったりすることってありましたか？

**西島：**あんまりないかな（笑）。たぶん、お店の人たちも何も変わっていなくて、来る人が変わったのと、見られ方が変わったのだと思います。私が広報・PRという立場でできたことは、新開地を深く掘り下げるということ。冊子『ザ・シンカイチツウ』[08]をつくるために、お昼もおやつも晩ごはんも、まちのあらゆるお店で食べまくりました。やっぱり食べてみていろんなことがわかるし、店主さんにお話を聞くと「それ、めちゃくちゃこだわってますやん！」みたいな発見がある。古くからあるお店のこだわりって、ご本人からすると、昔から当たり前にやってきたことだから「別にそれがどないしたん？」という感じなんですよね。私の役割は、それを掘り起こして伝えること。「まちづくり」と言われるものも、まちを新しくつくるのではなくて、もともとまちにあるものの良さを、いかに見せるかだと思います。いま私は新開地以外の場所でもPRの仕事をしていますが、そういう視点は大事ですね。

**羽仁：**図書館という場所のあり方、編集者という職能を広げていくことが、枠組みを超えた活動へとつながっているのだと思います。KAVCは公共の文化施設として、幅広い表現分野をカバーしながら、神戸・新開地の人たちに文化芸術を通してさまざまな体験や創造性に触れてもらう機会をつくっています。私は「アート」がもっと身近なものであってほしいと考えていて。すでに多様なジャンルが混在・横断しているKAVCにとって、アーティストの作品や視点をどうやって触れやすいものにするか、日々試行錯誤しながら活動しています。この地域にとって、ある意味距離がある物事を、さきほど坪下さんがおっしゃったように、どのように“実のある”近しいものとして紹介していくか。ちなみに、参考までにお聞きたいのですが、いまのKAVCはどのように見えていますか？

**西島：**KAVCが地域との取り組みをはじめたことは、まちとしては大歓迎だったんですよ。昔は「アート」というところで少し線を引かれている印象もあった（笑）。だから、いまは「新開地土曜マルシェ」[10]をKAVCの1階でも開催するなど、一緒に取り組めているなと感じています。

**坪下：**少し大きな話になりますが、いまの世の中って、機能性や数値目標がはっきりしているものが強いように思うんです。その一方で、文化芸術や人の精神面など、目に見えないものってすごく弱い。図書館もKAVCも、みんなが「絶対に必要だ」と頷くものではないと思うんです。仮に災害が起きたとして、「早く水道を復旧してくれ」という声はあっても「早くKAVCを立て直してくれ」という声があるかというと、おそらくそれは後回しになっていく。阪神・淡路大震災のとき僕は関西の大学の学生でしたが、やはり図書館復旧への要求は後回しだと感じました。でも、人間らしくいるために必要なこともあると思うんです。

**羽仁：**たしかに、一般的に文化施設をライフラインととらえる人は多くないかもしれません。

**坪下：**これは、下町レトロに首っ丈の会隊長の山下香さんがおっしゃっていたことなのですが、阪神・淡路の震災で周りがぐちゃぐちゃになったとき、山下さんは人間性を取り戻したくて、三宮に行ってコーヒーを1杯飲んだそうなんです。そうしたら、すごくほっとして「私、生きてるわ」と実感したと。弱い力ではあるけれど、「人はパンのみにて生くるものに非ず」[11]というか。物理的に暮らしの基盤があるだけでは、人間らしくはいられないんじゃないかな。そういった意味でも、KAVCとは連帯していけるといいですし、KAVCのなかに羽仁さんのような担当がいて、地域への窓口があることで、連帯できる状況になってきているなと感じています。

### 即効性はないけれど、あっていいもの

**羽仁：**地域を掘り起こしていくというお話が出ましたが、一方で、地域という枠組みを飛び越えて、横断していくような活動もそれぞれ展開されていると思います。

**坪下：**地域図書館は、土地に根ざすことをベースにしながら、外部のいろんな情報をまちの人に伝えていくということも、大事な使命として持っています。例えば、東日本大震災は、日本や世界にとっても大きな出来事ですが、復興の状況や現在の暮らしぶりなど、実際のことは現地に行かなければわかりません。図書館としても、そういった実のある情報を伝えていきたいと考え、盛岡の「3.11絵本プロジェクトいわて」[09]という、被災した子どもたちに本を届けるボランティアプロジェクトに参加し、そこでの活動を、展示などを通じて兵庫の人たちに伝えるということをしました。図書館を「物事を知るきっかけ」として使ってもらえたら嬉しいですね。

**西島：**私は、新開地まちづくりNPOで6年半働いたあと、出産を経てフリーランスになり、今は兵庫区の観光ボランティアの事務局も運営しています。そこは、まちの知識を持つ人たちがガイドとなって、兵庫大仏、平清盛や楠公さんのゆかりの場所など、さまざまな神社仏閣を巡るツアーを実施しているんです。私自身、あらためて歴史を掘り下げることができて面白い。フリーランスになって、幅広いエリアと関わるようになったからこそ、新開地や兵庫区の点と点を繋げられたらと思います。

### 均質化されない豊かな個性

**羽仁：**KAVCのスタッフは、芸術性の観点から「いいものをつくりたい」とクリエイションをするのですが、同時に、それらをはじめて観る人にどうやって伝えようかと考える人が実は揃っている気がしていて。シルクスクリーンのノウハウを独自にまとめた『###（メッシュ）』は、技術的な内容を盛り込みつつ、わかりやすくつくっていますし、コンテンポラリーダンスと現代美術の展示をしたときも、ちびっこ向けのワークショップを開いたり、まちのデイサービスの方々が観にきてくださったり。あとは、お互いの事業を見て、別の視点から面白さを発掘するということがスタッフ間で起こっているんですよね。ちょっとずつですが、風通しがよくなっているのかもしれないなと感じます。こう考えると、やっぱり動かしていく人が大事なんだなと。

**西島：**そうですね。人と、物事や場への愛。愛があるからこそ伝わるし、伝えられる。

**坪下：**組織のなかでは属人性を排したほうがいいという考え方もあるけれど、僕はそうじゃないと思うんです。“その人にしかできない”ということは必ずあるし、その役割が次の人に移ったら、また次の人なりの方法でやっていけばいいんじゃないかなと。ただし、マインドは一緒であってほしい。そうすれば、アプローチの仕方は違っても、連なっているものは伝わると思うので。

**羽仁：**今回、地域との向き合い方について考えてきましたが、みなさんが「地域」という言葉をどのようにとらえているか、あらためてお聞きできればと思います。

**西島：**ものすごく難しいですが、地域は“物語のある場所”だと思っています。地域って、自分が暮らしていたり、関わりがあったり、お仕事をしていたりする場所じゃないですか。だから、そのとらえ方は人によって違いますし、いろんな物語があるんですよね。

**坪下：**すごくわかります。以前、和田岬の「北の椅子と」[12]さんにお願いして、子どもたちと図書館の椅子をリペアするワークショップをしたことがあって。そのとき、店主の服部真貴さんには「図書館で物語をつくりたいんです」とお話ししたんですね。地元のヴィンテージ家具屋さんと子どもたちが協力し、図書館の椅子を直すということもですが、もし20年後、図書館を訪れたときに自分が修理した椅子があったら、すごくうれしいんじゃないかなと。

**西島：**まちは、そういった人知れずある物語の集合体みたいなものなんだなと。よく「新開地はカオスやな」と言われます（笑）。「なんでここにいるんだろう」というようなおっちゃんもいれば、めちゃくちゃおしゃれなお姉さんがいたり、子ども連れの家族もいる。これだけいろんな人がいるまちはなかなかないですよね。どんな格好をしていても、受け入れてもらえるような許容力もある。それがまちの魅力かな。

**坪下：**西島さんがいま話してくれたように、個々の物語が成立するには、それを語る第三者が必要だと僕は思っています。当事者からすれば、食べたり、話したりしているような、身体感覚を生かした日々の活動ですが、外側から見ると、その人やその人がいる環境の物語になっている。物語が魅力的であればあるほど、その地域に立ってみたい、住んでみたいと思えるんじゃないかな。

**西島：**ただ、新開地がどこにでもあるお洒落なまちになったら、個性は終わってしまうだろうなと思う。

**羽仁：**そうですよね。KAVCは、アートでまちを活性化するという役割を持って、これまで新開地の個性的な部分を、アーティストの豊かな視点を借りながらさまざまなかたちでアウトプットしてきました。そういった、まちの良さを見出す視点を多様につくりつつ、今後もこの土地と関わりながら、KAVCの取り組みを開いていけたらと思います。

収録日：2019年11月8日（金）KAVCにて

---

**［01］公共ホール現代ダンス活性化事業**
コンテンポラリーダンスのアーティストを公共ホールに派遣し、共同で学校などでのアウトリーチや公募型ワークショップを実施する地域交流プログラム、市民参加作品制作プログラム、公演プログラムのなかから1プログラムを実施する。参加者に表現や創造の感動を伝えるほか、新たな鑑賞者層の掘り起こし・育成につなげることを目的としている。（詳しくは中面KAVC REPORTを参照）

**［02］新開地まちづくりNPO**
かつて神戸の映画・娯楽文化を支えた新開地の盛り上がりを再生すべく、1999年に設立した事業組織。「市民主体のまちなか再生を」「安全で持続可能なコミュニティづくりの核に」「地域に根ざした文化・芸術復興を」という理念を掲げ、「神戸新開地音楽祭」「新開地映画祭」などのイベント企画、地域情報発信サイト「新開地ファン」の運営など、商店街や住民と協働で多様な活動に取り組んでいる。

**［03］ザ・シンカイチツアー**
2005年に新開地生誕100周年を記念してはじまった女性限定のまちあるきツアー。ガイド服を身に纏った西島氏の案内のもと、新開地の名店や劇場を巡りながらまちの魅力を体感。「リピーターお断り」というルールにこだわり、毎月1回・定員10名の規模で実施してきたが、2018年に迎えた100回目で惜しまれつつも閉幕。予約開始とともに定員が埋まるほどの人気企画として、多くの女性に親しまれた。

**［04］新開地カブキモノ大興行**
2018年よりはじまったKAVC主催のパフォーマンス事業。2019年に行った第2回には、ダンサーの長井江里奈氏が率いる舞台芸術団体「山猫団」、18〜83歳の一般参加者により構成された「新開地舞踊歌劇団」、加えて西島氏がザ・シンカイチツアーの出で立ちでガイドとして参加。長井氏を講師に迎えた体験講座＆練習日を設け、ともに創作したパフォーマンス作品を新開地商店街界隈で披露した。

**［05］神戸市立兵庫図書館**
神戸市内11区に整備された図書館の兵庫区設置館として1996年に開館。JR兵庫駅南のビル2階に位置し、アットホームな空間が利用者を迎える。地元店や住民が交流する「空き地マルシェ」や「新開地土曜マルシェ」に参加するほか、兵庫駅南公園を子どもの遊び場としてひらき、地域で活用していく事業「こどもフェスタ」の運営に携わるなど、地域に根ざした図書館として個性的な活動を展開している。

**［06］ジョイエール御旅**
JR兵庫駅の北側に位置するスーパーマーケット。御旅センター市場協同組合が運営し、精肉、青果、鮮魚、惣菜などのカテゴリーごとに、オリジナリティー溢れる兵庫区の地元店で売り場が構成されている。以前は市場として栄えてきたが、平成7年よりセルフ方式スーパーの形態へシフト。お店や生産者、スーパーの情報を発信する『ジョイエール御旅かわらばん』も、西島氏が取材・編集のサポートを担った。

**［07］KOBE CINEMA PORTフェス**
KAVC、パルシネマしんこうえん、Cinema KOBE、元町映画館の神戸のミニシアター4館が共同で企画・主催する地域映画イベント。「神戸100年映画祭」や「淀川長治メモリアル」などさまざまな映画祭やその歴史を引き継ぎ、神戸における映画文化のさらなる発展を目指して2018年、2019年に開催。期間中は共通チケットを使って、映画鑑賞はもちろん参加飲食店や施設も楽しめる。

**［08］ザ・シンカイチツウ**
新開地の飲食店の味と歴史を伝える無料小冊子。ザ・シンカイチツアーと同じく、2005年の新開地生誕100周年を機に制作され、増刷を重ねながら5万5000部を配布。コンパクトなA5サイズの紙面には「新開地クイズ」「街あるきMAP」も盛り込まれ、手軽にまちを巡ることができる。西島氏が企画・編集を手がけ、2015年には『続 ザ・シンカイチツウ』も発行。

**［10］新開地土曜マルシェ**
新開地まちづくりNPOがKAVCと共催し、地元商店街や団体の協力のもと、毎月第2土曜日にKAVC1階にて開催しているマルシェ。『まち暮らしをもっと楽しく』をコンセプトに、新開地のまちと兵庫の農村・漁村をつなぐべく、自然の恵みが詰まった食や暮らしの道具を集める。毎月、野菜や干物、お菓子や料理のほか、アクセサリーや雑貨など幅広いジャンルの出店者が参加。

**［09］3.11絵本プロジェクトいわて**
IBBY（国際児童図書評議会）の元理事長であり、JBBY（日本国際児童図書評議会）とも関わりの深い岩手県八幡平市出身の児童図書編集者、末盛智恵子氏が立ち上げたプロジェクト。支援協力有志・団体とともに、被災地の子どもたちへ絵本を届けている。各地に赴いて手遊び歌や読み聞かせなどを披露する「出張絵本サロン」のほか、本を載せた「えほんカー」の寄贈など、活動は多岐にわたる。

**［11］人はパンのみにて生くるものに非ず**
旧約聖書の申命記第8章3節におけるモーゼの言葉であり、新約聖書のマタイによる福音書第4章4節でイエスが引用した言葉。前者は、イスラエルの民が奴隷として扱われていたエジプトから脱出し、40年間荒野を彷徨ったときに、後者はイエスが40日40夜断食をして空腹を覚え、悪魔に誘惑されたときに放ったとされている。いずれも、生きるためには物質的な要素だけでなく、精神的な糧が必要と解釈されている。

**［12］北の椅子と**
兵庫区材木町にあるヴィンテージ家具店。1950〜1960年代の北欧家具・雑貨の販売を中心に、修理や買取、美容院や飲食店の内装、什器製作を行う。ヴィンテージ家具が配されたカフェスペースでは、地元近郊の野菜や体にやさしいこだわりの食材を使ったメニューも楽しめる。同スペースは各種教室企画の場として利用されるほか、イベントやライブなどでのレンタルも可能。地域に開かれた店舗となっている。


**坪下憲司**（たおした・けんじ）
交野市、西宮市、大阪市の図書館勤務を経て、2011年より神戸市立兵庫図書館に在籍。2015年に館長に就任。地域図書館としてのあり方を模索し、まちと図書館をつなげるさまざまなイベントや展示を企画する。積極的に地元店や催しに赴いて人々との関わりを深め、現在は地域行事の運営メンバーとしても活動。

**西島陽子**（にしじま・ようこ）
2005年、新開地生誕100周年を機に新開地まちづくりNPOの広報・PR担当に就任。ミニコミ誌やWebサイト、イベントなどの企画・ディレクションに携わる。現在はフリーランスとなり、同NPOの外部スタッフとしてPRディレクターを担うほか、神戸市内各地の商店街や市場の活性化、魅力発信のサポートを行う。

**羽仁真理子**（はに・まりこ）
2018年より地域事業担当としてKAVCに在籍。『KOBE CINEMA PORTフェス』や「カブキモノ大興行」のほか、兵庫図書館と連携した読み聞かせ・工作ワークショップやアーティストと子どもとのドローイング企画などを担当。地域にどのような場を開いていけるか、日々模索しながら事業に取り組んでいる。

神戸アートビレッジセンター
Kobe Art Village Center

# ART VILLAGE BIG VOICE

ISSUE 91
Jan.-Mar. 2020

**ART VILLAGE VOICE vol.91**
**発行日**：2019年12月26日
**発行元**：神戸アートビレッジセンター
指定管理者：公益財団法人 神戸市民文化振興財団
〒652-0811 神戸市兵庫区新開地5-3-14
TEL 078-512-5500　FAX 078-512-5356
開館時間 10:00-22:00
休館日 毎週火曜日（火曜が祝日の場合は翌日）・年末年始
**編集ディレクション＆編集**：多田智美・永江大（MUESUM）
**編集アシスタント**：鈴木瑠理子・妹尾実津季（MUESUM）
**アートディレクション＆デザイン**：仲村健太郎・小林加代子

**KAVC REPORT**　公共ホール現代ダンス活性化事業

## 出張ダンスワークショップ＠神戸市立湊川中学校

**日時：2019年10月30日（水）、31日（木）13:00～15:00　会場：神戸市立湊川中学校**
**講師：長井江里奈、北園優、鈴木綾香　対象：中学3年生4クラス**
**共催：一般財団法人 地域創造**（令和元年度 公共ホール現代ダンス活性化事業）　**協力：神戸市立湊川中学校**

公共ホール現代ダンス活性化事業（※）の一環として、10月30日（水）・31日（木）の2日間行った、神戸市立湊川中学校でのダンスワークショップ。1日2クラスずつ、全4クラス、延べ約120人が参加した。

取材は2日目。男女に分かれて整列し校内の講堂に入ってきた生徒たちは、号令に合わせて授業開始の挨拶を行う。続いて、山猫団3人が自己紹介。この自己紹介からこの日のワークショップは始まった。

自分の呼び名や好きなものを、身体（からだ）の動きと北園氏のピアノに合わせて、軽快に自由に披露していく長井氏と鈴木氏。最初は目を丸くして、少し緊張した様子だった生徒たちも、3人が醸し出すその軽やかさに、グッと惹きこまれていく。しばらくすると長井氏は、目が合った男子生徒をひとり、北園氏のピアノ演奏に巻き込んだ。ピアノ演奏に人差し指でセッションに加わり、自己紹介は終了。まだ体育座りをしたままの生徒から、大きな拍手が沸き起こる。

生徒は立ち上がると、長井氏と鈴木氏の動きを真似するワークへ。北園氏はピアノ演奏で場の雰囲気とリズムを次々に変えていく。鈴木氏は、綺麗に整列して踊る生徒たちの列をかき回して、生徒たちの縮こまった身体や空間の認識を、少しずつほぐしていく。

ダンスの振り付けを覚えて発表するワークでは、クラスごとに男女で分かれて4チームに。パートに分けて振り付けを覚えていく。はじめて見る動きを前に、生徒同士はにかみながらも難しいステップに挑んでいた。振り付けをなんなく覚えて身体を動かすチーム、身体が思うように動かないチーム。腕を回しながら膝をリズムよく曲げ伸ばす、ステップを踏みながら腕を振る…。身体を思いのままに動かす人もいれば、どうしてもちぐはぐな動きになる人もいる。そんな様子を見て「一生懸命やるんだけれども、できない。そのできなさは“個性”なんだよね。そのできなさこそ、誰も真似できない。」と長井氏は言う。

最後はチームごとに、覚えた振り付けを思い想いに工夫して発表。そして、ワークショップは最後のワーク「ゼロ」へと移っていく。

長井氏は、小気味よく話しているかと思えば、ある瞬間スッと口をつぐみ視線は遠くへ、身体は微動だにしない。そこで生まれた沈黙に、不思議そうな反応をする生徒たち。すると長井氏は「これから身体を止めるコントロールを、みんなにしてもらいます」と口を開く。このワークは、“ものになった自分”と“あたたかい自分”を行き来する練習なのだという。

ピアノの音を合図に、全員が講堂の中をバラバラに歩き出し、音が止まると身体の動きを完全に止める。またピアノの音に合わせて動き出す。沈黙に耐えきれず、あちこちで笑いが生まれる。しかし、次第に淡々と沈黙の繰り返しに身を預ける生徒が増えていく。

後半、長井氏は生徒たちの動きを見て、目に止まった何人かの生徒を壇上へと集めていく。そして同じ様に「ゼロ」のパフォーマンスをはじめる。見る側と見られる側に分かれ、普段の「友達」とは違うダンスの「身体」を見るとき、生徒たちは自然と、そこで生まれる沈黙を味わいながら壇上を見つめていた。

「ダンスは身体です。どんな人にも美しい瞬間があります。ほかの人がどうあれ、“自分はここにいる”と決めてそこにいる、ということは美しいんです。」と長井氏。ワークショップ終盤、生徒一人ひとりを見ながら語りかけていた。

生徒たちにとって、学校生活の中で触れるダンスや、そこで意識する身体とはまた違った体験になったのではないだろうか。今日、ここで山猫団の3人から生徒に投げかけられた言葉や体験は、彼らの日常生活の中に、これからどう響いていくのだろう。

※公共ホール現代ダンス活性化事業：
（一財）地域創造によるコーディネート・サポートのもと、コンテンポラリーダンスのアーティストが公共ホールに派遣される助成プログラム。KAVCでは、2018年より山猫団の長井江里奈氏と協働し、地域交流プログラムや公演を企画・実施しています。1年目となった2018年には、公募によって集まった18歳～83歳までの参加者を対象にダンスワークショップを展開。参加者によって結成した新開地舞踊歌劇団、神戸ほか関西を中心に活動する楽団 三田村管打団 7、そして山猫団がコラボレーションし、新開地商店街とKAVCホールを舞台に「新開地カブキモノ大興行」を開催しました。2年目となる今年は、KAVCから程近い神戸市立湊川中学校への出張ワークショップを中心に、地域との交流をより深めるべくプログラムを実施しました。

## 神戸みちくさ大国

**神戸アートビレッジセンターで日々開催される、さまざまな催しごと。合わせて「せっかくならここも行っとき～！」と背中を押したい、魅力的な道草スポットをご紹介。**

title: 三重野龍 / illustration: アイハラチグサ

### KAVCで、神戸の移民の歴史や外国人移住・労働者に焦点をあてた、ART LEAP 2019『いらっしゃいませようこそ』を見る

**30～40代のアーティストを対象にした公募展「ART LEAP」。公開プレゼンを経て選出された上海出身の美術家・潘逸舟（ぱんいしゅう）による展覧会が2～3月に行われます。「個人」と巨大な「社会」との間で矛盾し揺れ動く、身体やアイデンティティをテーマに表現を行う潘。今回はKAVCのある神戸における外国人移住・労働者に焦点をあて、長田を中心に神戸市内をリサーチし、その取材を生かした新作を制作します。今号は、展覧会をもっと深く楽しむためのスポットを紹介します。**

**日時：2020年2月22日（土）-3月15日（日）12:00-19:00**
**会場：KAVCギャラリー、KAVCシアター、スタジオ3**

## その後に 1

### 復興と交流の拠点 カトリックたかとり教会を訪れる

1927年に設立され、神戸の外国人が集まるキリスト教会。阪神淡路大震災によって全焼するも、建築家・坂茂によって紙管を使った仮設聖堂が建てられた（現在は台湾に移築）。現在も多言語ラジオや交流センターなど、外国人支援や地域交流の拠点となっている。

カトリックたかとり教会
神戸市長田区海運町3-3-8

## 新開地新名物 KAVC認定

### vol.8 芦原温泉の「番頭さんの記念撮影」

title & frame: 園田馨 / illustration: 黒木雅巳

新湊川近くで100年続く銭湯。3代目の名物番頭さんは、若者たちにも銭湯を使って欲しい！という想いから、芦原温泉にやってくる若者を記念撮影し続けているそう。熱々のお風呂と、番頭さんの志に触れてみては。

湯あそびひろば 芦原温泉　神戸市兵庫区湊川町2-10-11

神戸市発行の銭湯ガイドブック『オフンロ巡り2』にも掲載。日替り湯やキャンペーンが盛りだくさんで気になる……！

**推薦者**
橋本実弥［庶務・貸館担当］

## その後に 2

### 丸五市場に漂う ミャンマーカレーの香りに導かれる

優しい味が特徴の、ミャンマーカレーを味わえるお店。（潘さんもリサーチ中のお昼に訪れたのだとか！）「tete」のある丸五市場は、100年以上の歴史をもつ商店街で、中国や韓国など、多国籍な料理店が集まる長田の名スポット。作品に思いを馳せつつ、探索するのも◎

ミャンマーカレー TeTe
神戸市長田区二葉町3-11-5

## KAVC EVENT SCHEDULE

2020.01-03

### 1 JANUARY

**5日（日）、25日（土）**　会場：リハーサル室2、会議室1
**蛸の階 えんげきワークショップ**
講師：久野那美（蛸の階代表 / 劇作家・演出家）、蛸の階出演者

**8日（水）—13日（月・祝）**　会場：KAVCギャラリー
**NEW OPEN AREA 2020**

**10日（金）**　会場：リハーサル室2
**はじめてのアクションワークショップ II**
講師：人見円香

**11日（土）**　会場：1room
**新開地土曜マルシェ**

**11日（土）—24日（金）**　会場：KAVCシアター
**KAVC CINEMA**
**『つつんで、ひらいて』**
（2019年 / 日本 / 94分 / 配給 マジックアワー）｜監督：広瀬奈々子

**『完璧な他人』**
（2018年 / 韓国 / 116分 / 配給 ハーク）｜監督：イ・ジェギュ

**『ハード・デイズ・ナイト』**
（1964年 / イギリス・アメリカ / 87分 / 配給 シンコーミュージック・エンタテインメント / 提供 タムト）｜監督：リチャード・レスター

**11日（土）—17日（金）**　会場：KAVCシアター
**KAVC CINEMA**
**『ゲキ×シネ 劇団☆新感線　髑髏城の七人　Season花』**
1週間限定上映｜（2019年 / 日本 / 172分［別途幕間休憩あり］/ 配給 ヴィレッヂ、ティ・ジョイ / 著作 TBS、ヴィレッヂ）

**15日（水）—19日（日）**　会場：KAVCホール
**いるかHotel『破稿 銀河鉄道の夜』**
脚本・演出：谷省吾

**18日（土）—24日（金）**　会場：KAVCシアター
**KAVC CINEMA**
**『ゲキ×シネ 劇団☆新感線　髑髏城の七人　Season鳥』**
1週間限定上映｜（2019年 / 日本 / 178分［別途幕間休憩あり］/ 配給 ヴィレッヂ、ティ・ジョイ / 著作 TBS、ヴィレッヂ）

**25日（土）**　会場：KAVCギャラリー
**はじまりのみかた vol.6**
**「絵画材料のおはなし～絵具をクッキングしよう～」**
講師：加藤巧（美術家）

### 2 FEBRUARY

**1日（土）—2日（日）**　会場：KAVCホール　PICK UP 1
**Ensemble Sonne『Song of Innocence 無垢なるうた』**
振付：岡登志子

**1日（土）—2日（日）**　会場：1room、KAVCギャラリー
**蛸の階『行き止まりの遁走曲（フーガ）』**
脚本・演出：久野那美

**5日（水）—7日（金）**　会場：リハーサル室2
**Julia Ehrstrand ダンスワークショップ**
講師：Julia Ehrstrand（ジュリア・イーストランド）

**7日（金）—9日（日）**　会場：KAVCホール　PICK UP 2
**KAVC FLAG COMPANY 2019-2020**
**ももちの世界『ハルカのすべて』**
作・演出：ピンク地底人3号

**8日（土）**　会場：1room
**新開地土曜マルシェ**

**14日（金）—16日（日）**　会場：KAVCホール　PICK UP 3
**KAVC FLAG COMPANY 2019-2020**
**プロトテアトル『X X』**
作・演出：FOペレイラ宏一朗

**22日（土）—3月15日（日）**　会場：KAVCギャラリー、KAVCシアター、スタジオ3
**ART LEAP 2019「いらっしゃいませようこそ」**
出展作家：潘逸舟

### 3 MARCH

**14日（土）**　会場：1room
**新開地土曜マルシェ**

**18日（水）—20日（金・祝）**　会場：リハーサル室1
**市田京美ダンスワークショップ**

**20日（金・祝）—27日（金）**　会場：KAVCシアター
**KAVC CINEMA**
**『僕たちのラストステージ』**
（2018年 / イギリス、カナダ、アメリカ / 98分 / 配給 HIGH BROW CINEMA）
監督：ジョン・S・ベアード

**『ローレル＆ハーディの天国二人道中』**
（1939年 / アメリカ / 68分 / 配給 IVC）｜監督：エドワード・サザーランド

**『ニューヨーク公共図書館　エクス・リブリス』**
（2016年 / アメリカ / 205分［休憩あり］/ 配給 ミモザフィルムズ＝ムヴィオラ）
監督：フレデリック・ワイズマン

**ナショナル・シアター・ライブ アンコール上映**
（詳細は後日発表）

## 特報！ パフォーミングアーツ 瓦版

**今号のイベントスケジュールから、舞台芸術に関わる催しを選出＆ご紹介！**

### PICK UP 1
**神戸を拠点に活動する ダンスカンパニーによる、コンテンポラリーダンス公演！**

Ensemble Sonne（アンサンブル・ゾネ）は1993年に設立されたダンスカンパニー。神戸を拠点に、国内外からさまざまなアーティストを迎えながら、緻密な作品づくりを継続しています。現代を生きる人の身体を通して、人間の実存を問う作品をつくる彼ら。最新作『Song of Innocence 無垢なるうた』が2/1（土）～2（日）に発表されます。振付を代表の岡登志子氏、美術を美術家の梶ゝ子氏が担当。ダンサーとして垣尾優氏らが出演。

### PICK UP 2
**日常の中で見逃していく 都市の「音」を舞台上に載せる、新作演劇『ハルカのすべて』**

Photo: Junpei Iwamoto

「ももちの世界」は、ピンク地底人3号氏による劇団。3号氏は元納棺師という異色の経歴を持ち、いかにして「生きること」と「死ぬこと」を描くかという問いを軸に描かれた作品で、多くの戯曲賞を受賞している。本作品について「都市の音が、主人公・ハルカの身体で反射し、世界（我々）を変えていく。そんな作品をお見せできれば」と3号氏。昨年4月にワークショップ／オーディションで選ばれた役者たちにも注目！

### PICK UP 3
**過去の思い出や経験を呼び起こす プロトテアトルが、最大規模・最大人数での公演に挑戦！**

誰もが共感できる出来事を扱うことで観客の記憶を揺さぶり、過去から現在と未来を照らし出す劇団「プロトテアトル」。今回は2014年初演の『アサ村ショウ一郎』を大幅にリメイクした『X X』を2/14（金）～16（日）に上演します。「『他者によって語られる個人』にスポットを当て、架空の町を舞台に、曖昧な記憶や認識のズレ、とらえられない人物像から生まれる悲劇を描きます。」と代表のFOペレイラ宏一朗氏は語る。

## KAVC REVIEW これ見た？

ART

今回、取り上げるのは、
**スクリーンプリントのリトルマジン『###（メッシュ）』**

こんな本ですよ～ＫＡＶＣが発行している、スクリーンプリント（シルクスクリーン）のリトルマジン。スクリーンプリントとは版印刷のひとつで、メッシュに孔をつくり、そこにインクを落として印刷する手法のこと。年齢を問わず気軽に楽しめて、アイデア次第で、布や石などさまざまな素材にプリントできる、奥の深い印刷技法です。『###』では毎号テーマを設けながら、スクリーンプリントの工程や楽しさを伝えます。現在は5号まで発行。

**今号のレビュアー**
**風間雄飛**さん［札幌芸術の森　版画工房専門員］

私が最初に読んだスクリーンプリントのリトルマガジン『###（メッシュ）』はvol.05「刷れる！スクリーンプリン島」。もうタイトルと手刷りの表紙を見ただけでこの専門誌は面白いに違いないと確信できました。

『###』との出会いは、ＫＡＶＣから全国のスクリーンプリント制作が可能な工房として、札幌芸術の森版画工房に情報の掲載依頼をいただき、その際に見本誌を送っていただいたことから始まります。（まさか「無人島で上手に刷れなかった人のためのスクリーンプリント工房」の一つとして紹介されるとは思いもよらず……。）

vol.05「刷れる！スクリーンプリン島」は、無人島に流れ着いた2人の男女が、流れ着いた日用品でどうにかＴシャツにプリントしたいが、さてさて……という内容。少し（？）設定が飛んでいるように感じるが、実のところ内容は「無人島」を「家庭」に置き換えることができ、内容の通りに進めることができれば、家庭でも簡易的なスクリーンプリントを体験することができる。ただ、そんな家庭向け・初心者向けの内容かと思わせつつ、スクリーンプリント経験者にこそ知っていてもらいたい専門的な知識もここそこにちりばめられている。この号に限らず、各号オリジナリティのあるテーマとスクリーンプリントを絡めたユーモラスな内容と鮮烈なデザインであっという間にとりこになってしまうことでしょう。まさにスクリーンプリント素人から玄人まで楽しめる内容になっています。この幅の広さ、懐の深さこそスクリーンプリントそのものを表しているようにも感じます。

スクリーンプリントの技法は版画としても、テキスタイルとしても、印刷技術としても未だに使われています。そして印刷媒体も紙、布、陶器などなど多岐に渡っています。そんなフットワークの軽いスクリーンプリントを版画界ではときに軽んじられたりすることもありますが、だからこその「とっつきやすさ」があります。

『###』はそんなスクリーンプリントの「とっつきやすさ」を表現してくれているように思えます。きっと読むとすぐにでもスクリーンプリントをしたくなるはず。私もスクリーンプリント初心者の頃にも読んでみたかった。

ちなみにスクリーンプリント玄人の私のオススメはvol.03「げんなり食堂」とvol.05「刷れる！スクリーンプリン島」。どちらも斬新なアプローチで読者を少しだけおいてけぼりにしてくれます。とっつきやすいのにおいてけぼり。そんな不思議な魅力のある内容になっています。

さあ！『###』を読んでスクリーンプリントで制作したくなった方は家庭で試したり、お近くのスクリーンプリント工房に相談してみましょう。

**KAVCスタッフと、**
**ときどき保安のおっちゃん物語とは……**

本館の隠れた主人公・保安のおっちゃん3人衆のかたわらで、日々業務に励むKAVCスタッフ。彼らが見つめる新開地とKAVCの日常から、さまざまなエピソードを紹介していきます。

**作・画　鈴木裕之（すずき ひろゆき）さん**

本誌を機会に新開地デビューを果たした大阪出身・在住のイラストレーター。雑誌やCDジャケット、広告ほか、全国さまざまなイベントでの似顔絵屋、ワークショップなど活動中！

## KAVCのいま

僕が学生の頃、あるとき学園祭でミュージカルをやろう！という企画が持ち上がったことがある。誰もミュージカルなどやったことがなく、無謀とも思える企画を前に、あーでもないこーでもないと言い合って、ときに本気でケンカまでしたけれど、結果本番までなんとか漕ぎ着けることができた。ふと、あのときの謎の熱量は一体何だったのだろうと考える。それは「目指す一つの方向をみんなで見ていたこと」と「気兼ねなく互いにモノが言える空気があったこと」の2つによって、成り立っていたと思う。いま、KAVCで仕事をしていても、そういうことこそが「KAVC」というチームを支えていると思う。なぜなら事務所では、貸館・事業企画・総務・経理……日々目まぐるしくさまざまな仕事が同時に進行している。スタッフは各々の役割を持ちながらも、互いに支え合っているのだ。ときにシビアなこの仕事を、僕は仲良くおもしろくやることを心がけている。地域の人たち、利用者のみなさん、アーティストとそこから生まれる作品たちにとって、寛容で思いやりのあるアートセンターを目指して。

**執筆者**
竹下士敦［演劇・ダンス担当］
最近、小島監督の『DEATH STRANDING』にハマってます。あと、好きなモビルスーツはキュベレイです。

KAVC まるかぶりっ！
**かぶっクラブ**
KAVCの活動がわかる、特典付きメンバーシップ詳細はこちら↓

## STAFF's VOICE

KAVCスタッフが日々活動するなかで、興味を持ったものごとをざっくばらんに紹介していきます。
オススメイベントの詳しい情報などはWebサイトにて！

### VOICE 01

2020年2月からスタートする「ART LEAP 2019」の展覧会に向けて、出展作家の潘逸舟（はんいしゅ）さんが、神戸に滞在。1週間の取材に私も同行しました。今年から神戸で働きはじめた私にとって、神戸の街を作家の視点から見る経験はとても新鮮で印象深いものでした。私の視点と潘さんの視点がどのように共通し、違うのか。作品の完成が楽しみです。

中川恵理子
［美術アシスタント］

### VOICE 02

平川光江［総務アシスタント］

「新開地カブキモノ大興行」で使う手ぬぐいをスタッフ総出で制作しました。私にとっては、生まれてはじめてのシルクスクリーンプリント。予想以上に重労働で力加減が難しく、上手くいかないこともありましたが、1歩踏み出せば「ものづくり」の壁はそこまで高くないことを実感でき、すごく感動しました！自分が印刷した手ぬぐい、一生大事にします！

### VOICE 03

野澤美希［広報担当］

11月中旬の4日間、兵庫県内の中学2年生を対象にした職業体験活動・トライやるウィークを実施しました。今年は市内5つの中学校から9人を受け入れました。KAVCでの仕事について、中学生に伝わるように話すのに四苦八苦……。でも徐々に質問をしてくれて、興味を持って仕事に取り組む姿に励まされました。みなさん、お疲れさまでした！

## 神戸アートビレッジセンター

www.kavc.or.jp
指定管理者：公益財団法人 神戸市民文化振興財団
〒652-0811 神戸市兵庫区新開地5-3-14
TEL＝078-512-5500　FAX＝078-512-5356
開館時間＝10:00-22:00　休館日＝毎週火曜日
（火曜が祝日の場合は翌日）・年末年始

アクセス
- 神戸高速「新開地駅」8番出口より徒歩約5分
- JR「神戸駅」ピエラ神戸口より徒歩約10分
- 神戸市営地下鉄「湊川公園駅」東改札口より徒歩約15分

**ART VILLAGE VOICE vol.91**　**発行日**：2019年12月26日　**発行元**：神戸アートビレッジセンター（指定管理者：公益財団法人 神戸市民文化振興財団）［大谷燠（館長）、柳谷茂昭（館長代理）、林正樹（総務チーフ）、山本聡之（庶務・経理担当）、辻井修・橋本実弥（庶務・貸館担当）、近藤のぞみ（事業チーフ）、竹下士敦（演劇・ダンス担当）、岡村有利子（美術担当）、岡本酉子（映像担当）、羽仁真理子（地域事業担当）、野澤美希（広報担当）、明田春来・河合なお・平川光江・中川恵理子・前田詩穂（アシスタント）］**編集ディレクション＆編集**：多田智美・永江大（MUESUM）**編集アシスタント**：鈴木瑠理子・妹尾実津季（MUESUM）**アートディレクション＆デザイン**：仲村健太郎・小林加代子　**撮影**：衣笠名津美、新田さやか　**イラスト（内面）**：アイハラチグサ、黒木雅巳　**題字（内面）**：廣田碧（看太郎）、三重野龍　**漫画**：鈴木裕之